

「臨床検査データブック 1997-1998」

自治医学大学学長 高久 史磨 監修
 東海大学医学部長 黒川 清
 神戸大学教授 春日 雅人 編集
 東京大学助教授 北村 聖

日本大学医学部附属板橋病院臨床検査部

岩 田 進

近年、医学の進歩に伴って医療現場では、知っていなければならないことや覚えていなければならない事柄が飛躍的に増えている。臨床検査領域についても例外ではない。検査を利用する臨床家も、測定に当たる検査技師も自分の専門分野はともかくとして、日常診療に利用されている検査項目すべてについて基準値や臨床的意義、検体の保存法、薬剤が検査結果に及ぼす影響などを覚えているのは無理である。

臨床で異常値を手にしたとき、その意味や出現のメカニズムを知り、他のデータとの関連を考えることは、病態を把握するうえで極めて重要である。また検査技師が各診療側からの問い合わせに的確に対応するために基準値をはじめ、薬剤の影響、他の関連検査を知る手段を講じておくことは必須である。

本書は、そうした場面で利用するのに大変便利な構成と内容になっている。まず、「臨床検査の考え方と注意事項」、「検査各論」、「疾患と検査」の3部から成っており、「検査の考え方」の項では検査データ判読の基礎、基準値・基準範囲の概念と正しい利用法、保険請求上の注意点な

どが解説されている。

“検査各論”では600を超える検査項目すべてに、基準値、測定法、必要検体量、およそその検査日数の記載があり、“Decision Level”では異常高値、異常低値の見方と対策、統いて異常値の出るメカニズム、臨床的意義、判読の仕方、更に検体採取後の保存法、治療薬剤の影響など知りたい内容が、同じ順序でコンパクトに記載されている。

記載範囲も生化学的な検査から血液、免疫血清、遺伝子検査、薬物・毒物検査まで収載し、血液以外の材料では尿、糞便、その他の体液検査、細菌検査までカバーしその数600項目を超えている。

更に本書を便利なものにしているもう1つの項に“疾患と検査”がある。呼吸器疾患、循環器疾患というように13分野別に日常診療上頻度の高い270以上の疾患について病態、異常値、経過観察のための検査項目と測定頻度、更には診断と経過観察上のポイントが整理し記載されている。

これまでもこの種の本がなかったわけではないが、これほどの内容であると大体が2~3冊になり、と

ても机の上に置いて必要なときに気軽に開くというわけにはいかなかった。また1冊になっているものでは簡単すぎたり項目数が少なかったり、内容が乏しかったりで不満も残ったが、その点本書は、B6判で手軽でありながら、必要な事柄が要領よく最小限にまとめられている。特に検査の結果やその異常値から診断や病態把握の参考に利用できる面と、診断後の病態や経過観察のポイントなどを参考にしながら治療計画を立てる面の両面から利用ができる利点を備えている。また検査技師はもちろん、看護婦はじめ他の医療従事者が検査項目について調べたいときや、疾患と検査の関連について知りたいときに便利と思われる。

ともかく必要な項目が要領よく順序立ててコンパクトにまとめられているので、手元に置いて気軽に辞書の要領で利用できる。是非お薦めしたい1冊である。今後、臨床検査の進歩と検査項目の開発に合わせて改訂していくことを願っている。

●B6 頁528 図17 表67 1997
 定価(本体4,500円+税) ¥400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)